

新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）は なぜ効果を発現できないか — 一日中韓の比較およびデータに基づく分析 —

○氏名 三友仁志 Hitoshi Mitomo

Keywords : 接触確認アプリ プラットフォーム 効果の発現 データネットワーク効果

1 目的

本研究の目的は、6月17日に提供が開始されたわが国の新型コロナウイルス接触確認アプリCOCOAに関して、中国の接触確認アプリ「健康コード」および韓国の感染者移動経路管理と比較するとともに、プラットフォームとしての効率性の観点から利用可能なデータに基づき普及状況を分析し、その問題点を明らかにする。①ICTを用いた日中韓における接触確認手法を比較し、②厚生労働省が発表するデータに基づき、普及の状況とその要因解明の可能性について分析する。

2 方法

まず①ICTを用いた中国および韓国における接触確認手法の比較に関してだが、現在、現地調査は困難なので、情報が極めて限られている。政府ウェブサイトや報道等から情報を収集し、その特徴を明らかにする。それに基づき、わが国の新型コロナウイルス接触確認アプリとの相違点を確認する。②データに基づく普及の状況とその要因解明に関しては、現在公表されているデータは限定的で不完全ではあるものの、6月17日以来収集したデータに基づき、普及の状況を概観し、感染拡大に関連する他の指標との相関等を確認する。さらにデータネットワーク効果の存在や私的便益と社会的便益の乖離などから、この種のアプリの効果発現の必要条件を理論に基づき提示し、わが国の新型コロナウイルス接触確認アプリの普及上の課題を明らかにする。

3 結果

中国では、その前身となる自主登録プラットフォームが2月に深圳において提供が開始されるなど、迅速な開発と導入が進められた。また国民の大半が利用しているWeChatに組み込まれ、人々の移動の可否の判断等に健康コードを積極的に活用したことから、社会が同アプリへの依存性を高めた。政府は国家版健康コードプラットフォームを構築し、それに依拠して地域の健康コードが結合されたため、データネットワーク効果が働き普及を加速した。韓国ではアプリに依存せず、自治体の情報公開が最も有効な情報提供として定着した。他方わが国では、プライバシー懸念から匿名性への関心が強く、効果を発現させることに関しては極めて無頓着であった。その結果、データを見る限り、ダウンロード数は一定の増加を見せているものの、感染者の登録数が極めて低く、アプリの効果があるとは言えない状況が続いていることが明らかになった。

4 結論

社会において個々人が平時活用できないアプリから形成される便益は低く、期待される社会的便益と大きな乖離があること、陽性者の登録が任意であり極めて限られた数の登録にとどまっていることが効果の発現を妨げている。社会体制やプライバシー概念の相違等はあるが、中国や韓国の経験を参考に、わが国の接触確認アプリが効果を発現するための対策をとる必要がある。

【主要参考文献】

Parker, G. G., M. W. Van Alstyne, S. P. Choudary (2016), *Platform Revolution: How Networked Markets Are Transforming the Economy - and How to Make Them Work for You*, W. W. Norton & Company
厚生労働省、新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）COVID-19 Contact-Confirming Application、https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/cocoa_00138.html